日本学研究叢書 4

日本中世文学における儒釈道典籍の受容

『沙石集』と『徒然草』

曹景惠 著

國科會人文學研究所中心補助出版

臺大出版中心
NATIONAL TAIWAN UNIVERSITY PRESS

日本学研究叢書 4

日本中世文学における儒釈道典籍の受容

―『沙石集』と『徒然草』―

曹　景惠　著

『日本学研究叢書』刊行に際して

台湾大学が戦後に旧台北帝国大学から受け継いだ日本研究に関する文献は、膨大かつ貴重なものであった。そして日本研究は長い歴史と伝統をもつ。この度、21 世紀のグローバル化した新時代に日本学研究の潜在力を喚起するために、台湾大学人文社会高等研究院「日本、韓国研究プラットホーム」の発足を契機に『日本学研究叢書』を出版する運びとなった。

さて、東アジアという枠組みで見渡すと、日本、中国、韓国などの国で展開した日本研究は、それぞれに特色のある内容を保っているが、台湾における日本研究は実績があるものの、とりわけ、人文と社会科学分野でクロスした対話は、必ずしも十分とは言えず、むしろ欠如しているという現状にあると言えよう。

そうした現状に照らして、本シリーズの刊行は、「人文と社会の対話」というキーワードを問題意識として、共通性と相異性の諸相を明らかにした研究成果をまとめ、次の四つの目的を遂行しようとするものである。

(1) 人文社会科学分野における台湾の日本学研究を統合、強化すること。

(2) 新たに「日本学研究」の学習環境を切り拓き、若手研究者の養成を深化させ、学際的、国際的な方向への発展を期すること。

(3) 日台両国の関連研究機構と緊密な連携を促進し、東アジ

アにおける日本学研究の構成を積極的に推進させ、国際共同研究の達成を目的とする。

(4) 世界における日本研究の成果を生かし、台湾独自の特色ある日本学研究の発展を確立すること。

本書は台湾大学の「日本学研究叢書」の一冊として、東アジアの伝統文化および伝統的価値を深く掘り起こすだけでなく、新たな日本中世文学研究を切り拓き、日中文化交流の視野を入れた貴重な成果を見せ、新しい視点と方法の展開を示唆し、台湾における日本学研究の発展に大きく寄与するものであることは特筆されよう。

本シリーズは、国境を越え、学問的領域を越え、学術の国際化を図るために、台湾では初めて日本語による単行本の出版を試みたものである。今後も、さらに高度な研究成果が本叢書から創出されることを願っている。

2012年2月5日

編集委員長

徐　興慶

日本中世文学における儒釈道典籍の受容

ー『沙石集』と『徒然草』ー

目次

序論 1

凡例 17

第一章　『沙石集』における『老子』の受容
　　ー巻第三ノ一をめぐってー 27

第二章　『徒然草』における『老子河上公注』の受容 69

第三章　『徒然草』における『論語』注釈書の受容 95

第四章　『徒然草』における道念
　　ー儒釈道典籍の受容ー 139

第五章　『徒然草』と『沙石集』との共通記事の一考察 165

第六章　『沙石集』における三聖派遣説の源泉 195

参考文献 247

初出稿一覧 257

人名索引 258

序　論

本書は鎌倉期に成立した散文文学作品、『沙石集』と『徒然草』との両書における儒家典籍・道家典籍及び仏教典籍の受容の様相についての考察を纏めたものである。

『沙石集』は鎌倉時代の中頃、弘安六年（1283）に成立した全十巻の仏教説話集である。その執筆動機や成立事情については、同書の序及び巻十末の識語に明記されているが、作者無住道暁（1226 - 1312）が自ら序文に、「それ麁言軟語みな第一義に帰し、治生産業しかしながら実相にそむかず。然れば狂言綺語のあだなる戯れを縁として、仏乗の妙なる道を知らしめ、世間浅近の賤きことを譬として、勝義の深き理に入れしめむと思ふ」と述べているように、「徒らなる興言」「賤き世の事」など、一見卑俗に見える説話を「道に入る方便」の一つとして書き集め、例話を通して「在家の愚俗」に仏教の要旨を語り、仏道への精進を勧めるという明白な意図を持つ啓蒙的書物であることは明らかである。もともと比喩、例話を以て法を説くというのは仏法布教の典型的手段であるが、特定の宗派の思想にとらわれず、古今東西にわたる多彩な話題に即しつつ、難解な教理と卑近な世界とをつなげて自在に文章を織りなすところに、他の仏教説話集にはない無住独自の世界が展開する。

無住は若い時期から律や天台に触れ、法相・華厳・真言・禅などと多方面にわたって勉強しており、東福寺の開山であ

る円爾に師事し、円爾から多大な影響を受けている。無住自らが、

> 愚老律学ノ事五六年、定惠ノ学欣慕顕学密教、聞禅門、晩学ノ故ニ、不何宗得其意。然ドモ大綱聞之。依此因縁。三学ノ諸宗同ク信ジ、別シテ宗鏡録禅教和会無偏執故多年愛ス。既ニ何ノ宗モ如此。学行無実、但無偏執心。[1]
>
> 故東福寺ノ開山ノ長老、聖一和尚ノ法門談義ノ座ノスエニ、ソノカミノゾミテ、時々聴聞スル侍シニ、顕密禪教ノ大綱、誠ニ目出クキコヘ侍キ。其旨ヲエズト云ヘドモ、意ノ及ブ所、義門心肝ニ染テ、貴ク覺ヘ侍キ。ウラムラクハ、晩歳ニアヒテ、久座下ニアラザル事ヲ。然而佛法ノ大意、ヨクヨク教訓ヲカブリ侍リキ。[2]

と述べるように、聖一国師と称される師円爾の禅密融合・儒仏道三教一致の融和思想を受け継ぎ、「諸教の義異ならず。万行を修する旨皆同じき者をや」[3]と諸宗の実は一に帰入して同一であることを主張し、「各様の方向性を持つ教理をアナロジーによって無葛藤に共存させる傾向」[4]の持ち主である。無住

---

[1]『雑談集』巻一の十四「三学事」、74 頁。『雑談集』は無住の手により、嘉元三年（1305）七月十八日に脱稿した書物である。『雑談集』の引用は『雑談集』（中世の文学　東京：三弥井書店　1976 年）に拠った。

[2] 梵舜本『沙石集』巻第三ノ八（日本古典文学大系 85　渡邊綱也校注　1966 年　東京：岩波書店）、164 頁。

[3]『沙石集』（新編日本古典文学全集 52　東京：小学館　2001 年）、20 頁。

[4] 三木紀人「無住小論」『説話文学』（日本文学研究資料叢書　東京：

のかかる顕密禅兼学・諸宗融和の習合思想は、『沙石集』に如実に反映している。『沙石集』を紐解くと、全篇に漢籍からの引用がしばしば見られ、道家思想が混入していることは早くも本多辰次郎氏に注意された[5]。さらに、藤原正義氏は「沙石集における無住の思想の特徴点の一つは、新旧仏教はもとより儒老などをひろく包みこんでいること」であり、「顕密禅教のみならず老荘をも包接」し、「きわめて包括的かつ方便的なものであったこと」であると指摘されている[6]。

一方、『徒然草』は鎌倉末期に成立した、随筆風に書き綴られる長短二百四十三の章段から成る書物である。王朝趣味・有職故実への関心、平安貴族文化への尚古的態度、仏教的無常観に立脚しての人生への省察、人間や社会に対する鋭い洞察と理解力など、極めて多種多様な内容を有する作品であるが、作者兼好の儒家、道家及び仏家の三家の思想に対する深い関心と理解が『徒然草』という書物の成立の大きな基盤となっていることは、早く近世期以来の様々な『徒然草』注釈書に指摘されている。最初の注釈書である『徒然草寿命院抄』（慶長九年刊）の著者秦宗巴は巻頭に、「兼好得道ノ大意」として「儒釈道ノ三ヲ兼備スル者」[7]と述べているのは、作者兼

有精堂　1972 年）、264 頁。

[5] 本多辰次郎「沙石集に就いて」『古典研究』3 巻 2 号、1938 年 2 月、9 頁。

[6] 藤原正義「徒然草と沙石集－その思想と文体－」同『兼好とその周辺』（東京：桜楓社　1970 年）所収、139 - 142 頁。初出は「徒然草と沙石集－その思想と文体とをめぐって－」『日本文学』11 巻 10 号（日本文学協会　1962 年 11 月）。

[7] 吉澤貞人『徒然草古注釈集成』（東京：勉誠社　1996 年）、3 頁。

好の思想及び『徒然草』の全体像を考える上で重要な指摘であり、以後の『徒然草』研究に一つの指針を提供することとなった。近代の国文学者、安良岡康作氏は各章段の内容を検討した上で、『徒然草』の「創造活動の基盤として、兼好が、意識するとしないとにかかわらず、拠り所とした文学的伝統」として、「平安朝文学の伝統、ことに和歌と物語の伝統」以下の五項目を掲げているが、その第二項に「中国の古典の影響」、第三項に「仏教関係の典籍」を立てられている[8]。また、福田秀一氏[9]・久保田淳氏[10]による『徒然草』の典拠研究においても、漢籍と仏典の受容の問題が重視されている。

『沙石集』の成立期（弘安六年）は『徒然草』の著者兼好の生年と推定される時期であり、『沙石集』は『徒然草』に先行する書物である。『徒然草』と『沙石集』との関係については、早く黒田亮氏が両書の間に共通記事がいくつか存することを注意されている[11]。また、三木紀人氏は、東国出身の無住と、関東に深い由縁があって知人も多い兼好との間にあった共通の地縁を考慮するならば、兼好が『沙石集』に対して全く無縁であったとは考え難いとされている[12]。実際、『沙石

---

[8] 安良岡康作「徒然草概説」『徒然草全注釈』下（日本古典評釈全注釈叢書　東京：角川書店　1971年）、602 - 605頁。

[9] 福田秀一「徒然草の出典と源泉」同『中世文学論考』（東京：明治書院　1975年）、360 - 379頁。

[10] 久保田淳「出典・源泉・先蹤」市古貞次編『徒然草：諸説一覧』（東京：明治書院　1970年）114 - 172頁。

[11] 黒田亮「無住と兼好」『文学』第7巻第6号、1939年6月、94 - 96頁。

[12] 三木紀人「隠遁文人の世界　徒然草」『日本文学講座七　日記・

集』と『徒然草』とを丹念に読み較べるならば、知識・関心の広さと多彩さ、特定の思想に捉われず、よかれあしかれ柔軟な精神、人間のおかしさに独特の視線を向け、聖なるものと滑稽とを同じ視野でとらえようとする志向など、両者の類縁の多さは容易に気付かれるところである。中世の隠者文学をめぐるある座談会において、木藤才蔵氏は「『沙石集』の世界というのが存在していたからこそ、この『徒然草』の世界が可能になったということは言えるのではないか」と述べられているが、三木紀人氏はこの木藤氏の見解に賛意を示され、「『宇治拾遺』的世界をさらにその前に置くなら、『徒然草』を生むに至る系譜が浮かび上がってくる」という見通しをも提示されている[13]。『沙石集』を随筆に転移する一歩手前にある説話評論の書として位置付ける見方があるが、文体・表現の手法・自己を省察する発想の諸点において、『徒然草』は『沙石集』に負う部分が少なくないと認められるのである[14]。また、思想面における両書の連関についても、例えば、藤原正義氏は「老荘の無為無我をも援用し、それとの一致をさえ云い、無我・道心・道人を説いた、止観を中軸とする無住の思想が、天台の教学に学ぶところがあり老荘にも共鳴するところのあった兼好の思想・人間の形成に、直接間接に一つの要因として働いていたであろうと考えることは、あながち不当

随筆・記録』（日本文学協会編　東京：大修館　1989年）、256頁。

[13] 「第五章兼好」伊藤博之司会『中世の隠者文学』（シンポジウム日本文学六　東京：学生社　1976年）、186頁。

[14] 西尾光一『中世説話文学論』（東京：塙書房　1963年3月）、36－43頁。

な推断ではあるまい」[15]と述べ、顕密禅教のみならず老荘・儒教をも包摂する無住の思想と、儒老などを広く包み込む仏者兼好の考えとの繋がりを積極的に認めているのでる。

『徒然草』と『沙石集』とはともに儒家・道家及び仏教という三家の思想を内包し、いわゆる三教一致という宥和的態度が読み取られる書物であるが、両書の関わりが甚だ深いものであることは広く認められている。しかしながら、どの箇所がどの典籍を引用しているかという基本的な事柄ですら研究者によって見解が異なり、『徒然草』と『沙石集』における漢籍・仏書の受容についての研究は、今日においてもまだ十分に解明されていない部分が残され、更に綿密な検討が必要とされている。また、『沙石集』と『徒然草』との関わりが極めて緊密であるという指摘もやや漠然としていて、単に儒釈道三家の思想の混在や共通記事が両書に見出される程度のものに過ぎず、それらの思想がどのような形で融和し、統一的な論理を形成しているのか、そして両書はどのような形で繋がりを持っているかについては十分に説き明かされていない。

本書では以上の先行研究を踏まえつつ、『沙石集』と『徒然草』における儒釈道典籍の受容問題に焦点を当てて、儒家思想、道家思想及び仏教思想との関連の視座から、両書の内実や作者無住・兼好の思想的骨格をできる限り明らかにしてみ

---

[15] 藤原正義「徒然草と沙石集－その思想と文体－」同『兼好とその周辺』（東京：桜楓社　1970年）所収、140－141頁。初出は「徒然草と沙石集－その思想と文体とをめぐって－」『日本文学』11巻10号（日本文学協会　1962年11月）。

たい。具体的には、『論語』『老子』『荘子』といった儒家・道家の代表的典籍及び仏教関係書籍の記事の引用が指摘されている箇所を取り上げて、その内容や表現、論理の組立てをあらためて分析するという手続きを取る。また、その際、日本における儒家・道家・仏教典籍の流布状況や鎌倉期の時代思潮、そして作者無住・兼好の教養・読書範囲にも留意して論を進めたい。

以下、各章の論旨を略述する。第一章「『沙石集』における『老子』の受容」ではまず、『沙石集』巻第十末ノ十二・巻第九ノ二十五・巻第四ノ二などの諸篇に見出される『老子』からの引用文を取り上げて検討し、『老子河上公注』の施注を極めて忠実に踏まえての引用のし方から、無住の『老子』摂取は『老子河上公注』の施注を介してのものであったことを指摘した。無住は『老子』を愛読し、『老子』思想をよく会得できたことを確認したうえで、次に、『沙石集』巻第三ノ一に焦点を当てて、説話に向けられた無住の関心と、説話を通じて語られる無住の法談の内実、すなわち小島孝之氏のいわゆる「原理的問題」[16]との関わりについて考察したところ、『老子』の思想は、巻第三ノ一の法談の流れを形成する、いわば核として機能したことを指摘した。ほとんど異常とも思えるほど反復を厭わず同趣の記述を再三繰り返し用いざるを得なかった巻第三ノ一では、「死にたればこそ生きたれ」という言語形式に対する無住の強い関心が示されているが、「死にたればこ

---

[16] 小島孝之「無住晩年の著述活動」『中世説話集の形成』（東京：若草書房　1999年）、64頁。

そ生きたれ」という定式化された「道理」は、その思想的源泉を『老子』の「曲トキハ則全シ、枉トキハ則直ナリ、窪クボキ則盈トキハ、弊フルキ則新トキハナリ」「禍ハ兮福ノ之所レ倚、福ハ兮禍ノ之所レ伏」という思考に求められることを論証した。

第二章「『徒然草』における『老子河上公注』の受容」は、『徒然草』第三十八段・第八十三段・第百三十段の三段を取り上げて、『徒然草』における『老子』の受容は『老子河上公注』を媒介にしてのものであったことを考証するものである。第八十三段末尾の「月満ちて欠け、物盛りにしては衰ふ。よろづのこと、先のつまりぬるは破れに近き道なり」という一文について、近世期以来の『徒然草』諸注釈書では、『史記』范睢蔡澤傳に「語曰、日中則移、月満則虧、物盛則衰、天地之常數也」とある一文をその典拠としてきたが、本論では、藤原公衡と藤原実泰が太政大臣への昇進を自ら断念したという第八十三段の記事内容が、『老子』第九章「功成リ名遂テ身退クハ天ノ之道ナリ」という章句の趣旨とよく符合しているのみならず、当該章句につき、『老子河上公注』の「言ワハ人所レ為、功成リ事立テ、名跡稱ヒ遂テ、不二退レ身避一レ位、則遇二於害一、此乃天ノ之常道ナリ也。譬ハ如シ二日ノ中ル則移リ、月満ルスハ則虧ル一、物盛ハ則衰フ、樂極テ則衰フナリ也」という施注と同段末尾の上引文ともよく合致しているところに注目し、第八十三段の記事は『老子』の思想を包摂しており、兼好の叙事が『老子河上公注』を踏まえてのものであったことを論証した。また、従来の研究では、『徒然草』第三十八段は老荘思想を下敷きに展開される章段であり、兼好がいう絶対的存在、「まことの人」

とは『荘子』逍遥遊の「至人㆑無㆒己。神人㆑無㆒功。聖人㆑無㆒名」という理想的人間像を踏まえてのものであると指摘されていた。それに加えて本論では、第三十八段の「まことの人は智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし」という理想的人物像と、『老子』第十五章の「古之善為士者」との同一性に留意しつつ、「古之善為士者」につき、『老子河上公注』の「不有徳名功」や「修道於身、（中略）乃為真人也」という施注と上引した第三十八段の記事との叙述上の一致が見られることを指摘した。第三十八段の「まことの人」という世俗的な価値を超越した自由自在、融通無碍の理想的存在を形造る要素として、『荘子』の「至人」「神人」「真人」のみならず、『老子』第十五章の「古之善為士者」のイメージ、及び当該章句につき、『老子河上公注』の「不有徳名功」という施注と同書の「修道於身、（中略）乃為真人也」という疏釈が存することを論証した。

『老子河上公注』は江戸時代以前に『老子』読解によく使われる注釈書と認められているが、本書第一章・第二章において『沙石集』『徒然草』の両書における『老子』からの引用文を検討したところ、鎌倉期から室町時代にかけて『老子河上公注』を介して『老子』が享受され、広く読まれたという文化的背景、そして現存する『老子』古抄本がすべて河上公注を底本としてのものであるという事実ともよく照応し、それらの事項を裏付るような結論と言えよう。

第三章「『徒然草』における『論語』注釈書の受容」は、『徒然草』中に『論語』からの記事・文言の引用が既に指摘され

ている幾つかの章段について、日本における『論語』受容史を踏まえた上で、兼好がどのような論語テキストに拠って当該の記事を受容していたのかということを具体的に論証するものである。『徒然草』第百三十三段の「大方、東を枕として陽気を受くべきゆへに、孔子も東首し給へり」という一節について、従来の研究では、この記事が『論語』郷党の「疾(ヤマヒ)、君視(ミル)之、東首加㆑レ朝服、拖紳(ヒクシム)」を典拠とすることは指摘されていたものの、「東を枕として陽気を受くべきゆへに」という記事について、その由来を明示するには至っていなかった。本論では、当該章段についての『徒然草寿命院抄』の記事に注目し、その文言がとくに皇侃の『論語義疏』の記事とよく一致することを指摘した。『論語義疏』は中世日本における『論語』読解の基本的テキストと認められている書物であって、『徒然草』第百三十三段の当該文言は、兼好が『論語義疏』に拠って『論語』を読んでいたことを裏書するものであると理解されるのである。その他、第二百十一段・第百二十九段・第八十五段・第百四十二段等の記事文言に注目して、これらが当時の日本において広く読まれていた『論語集解』『論語義疏』といった論語古注の記事内容とよく符合する事実を指摘し、兼好が当該の論語古注に拠って『論語』を読んでいたことを実証した。

第四章「『徒然草』における道念－儒釈道典籍の受容－」は、『徒然草』全段中に頻出する「道」の関連章段を取り上げて、儒家典籍、道家典籍及び仏教典籍の三方面との関連の視座から、兼好の道念のあり方を分析するものである。第四十九段・

第五十八段・第七十五段・第九十二段等には、『往生拾因』『一言芳談』『摩訶止観』など仏書よりの引用が見出され、仏道勧進や仏教思想の濃厚な章段として位置づけられているが、兼好は「たゞ今の一念」を大切にし、いち早く仏道精進の覚悟をすべく、遁世して「まぎるゝ方なく、たゞひとりある」ことの重要性を唱えている。本論ではとくに、「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ」という、兼好が理想とする生活の閑寂境・心身の安楽境に注目して、それがむしろ『荘子』の「無為誠楽」という思想を受容し、老荘的な生き方への志向を内在させていることを論証した。また、第百七十四段に見える「道を楽しむ」という叙述の背景に窺い見られる兼好の道念は、仏道に寄り添いつつも仏道そのものに収斂されるのではなく、『論語』に説かれる「好之者、不レ如二楽之者一」や『論語集解』『論語義疏』に述べる「楽道」という概念を基盤としてのものであることを指摘した。換言すれば、儒家思想において最上の境地とされる「楽之」という態度を以て仏道に臨むことを勧める兼好の道念を、そこに読み取り得るのである。無常の自覚によって仏道に対する精神的希求・仏道精進への意欲を示しているものの、兼好は「つれづれ」つまり「まぎるゝ方なく、たゞひとりある」という心身の閑静境・安楽境を仏道に向かう最終的目標として捉えており、真の仏教的、求道的立場に徹していない。第七十五段の「いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずして、心を安くせむ

こそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ」という一文の根底には、『荘子』の「無為誠楽」という思想の受容があったと考えられるが、「まことの道」を悟ることとは異なる地点で生の充実を見つけようとする兼好の態度は、第百七十四段の「人事多かる中に、道を楽しむより気味深きはなし。是、まことの大事なり」という一文にも示されている。ここでは儒家の「楽之」という思想が拠り所とされているのである。「つれづれ」という詞に兼好は新たな価値を見出し、それを生の最高の境地とするが、本論では、「つれづれ」という兼好にとっての生の最高の境地を求める道程において、儒釈道三家の思想の折衷・宥和が認められ、兼好の理想境は実は、儒書に説く「楽之」「楽道」という思想と、道家が唱える「虚静」「無為誠楽」の境地と、諸縁放下を実践行とする仏道修行との三者が合一する地点に成り立ったものであることを論証した。

第五章「『沙石集』と『徒然草』との共通記事の一考察」は、『沙石集』と『徒然草』との共通・関連記事を取り上げて、両書の相関性を考察するものである。『徒然草』第四十九段では『沙石集』との共通記事が二箇所見出される。冒頭の「老来て、始て道を行ぜむと待ことなかれ。古き塚は、多くこれ少年の人なり」という一文は、梵舜本『沙石集』にも「古人云」としてそれを記しているが、その典拠となるものについて諸説があるものの、まだ定説が見られない。本章では、『金剛經』の内容を分かりやすく説明し、対俗教化用の宝巻形式の仏書である『銷釋金剛經科儀』に見出される、「莫待老來方學道。孤墳盡是少年人」という一文との類似に注目して、「莫

待老來方學道。孤墳盡是少年人」という文言は恐らく、遅くても南宋までにすでにある程度中国に広く享受され、流行っていた語句であること、また仏教典籍の将来とともに当該文言は鎌倉時代には仏者の間で膾炙していて、無住や兼好が一種の諺としてその文句を引用したという可能性を指摘し、新たな典拠となるものを提示した。また、『徒然草』と『沙石集』とでは心身の安楽への志向が見られるものの、無住は、あくまでそれを仏道修行に至る前段階として捉え、往生の本願のためにも仏道精進を勧奨するところに主眼を置く。ここに無住の思想と兼好の道念との相違が存するのである。「心身の安静境」をめぐる『沙石集』と『徒然草』の態度には次元の相違がはっきりと見られるが、両書は仏道勧進という主題に共通していること、また兼好と無住とはともに同じ時代を生きて共通の地縁を有していたこと[17]などの事柄を併せて考えてみると、「諸縁放下」「心身安楽」を唱える際に、ともに『摩訶止観』に関連付ける無住と兼好との筆法の類似から、兼好は、啓蒙的仏教説話集として当時流布していた『沙石集』を媒介にして『摩訶止観』の文言に着目し、『徒然草』七十五段中にそれを引用したという可能性も大いにあることを検討した。

第六章「『沙石集』における三聖派遣説の源泉」は、中国・日本における三聖派遣説の文献記事や流布状況を考察した上で、無住の学識・読書範囲や思想傾向を踏まえつつ彼の三聖

---

[17] 拙稿「無住と兼好」『台大日本語文研究』第 11 期、2006 年 6 月、161 - 186 頁を参照。

派遣説知識の源泉を探るものである。『沙石集』巻第一ノ一「太神宮の御事」の末尾では和光同塵・本地垂迹の自説を裏付けるために、漢朝における本地垂迹・三聖派遣の事例を借用して同条を締め括ったが、儒童・迦葉・光淨の三人の菩薩が漢朝において、それぞれ孔子・老子・顔回に化身し、外典を持って人々を教化したという三聖派遣説の記事の典拠について、従来の研究では不明な点が多く残されている。本論では、中国・日本における三聖派遣説の記事文献をあらためて考察、分類整理したところ、日本では、少なくとも九世紀以降、『止觀輔行傳弘決』を主たる媒介として『清淨法行經』の三聖派遣説を受容していたことが確認されるが、『沙石集』巻第一ノ一に記される三聖派遣説は、菩薩名の割当が平安末期書写本とされる名古屋長福寺（通称七寺）所蔵『清淨法行經』の三聖派遣説や『止觀輔行傳弘決』巻六所引『清淨法行經』の記事内容とは違っており、「世人常云孔子是儒童菩薩」という一文が示す如く、唐代に世間に浸透して人々の一般的認識・理解となっていたと思われるもう一説のほうに一致していることを明らかにした。無住は、『止觀輔行傳弘決』『広弘明集』『萬善同歸集』『鐔津文集』などの書物を介して、いわゆる三聖派遣説の内容をよく把握し、菩薩名の割当における両説の並存をもおさえていたかと想定されるが、本論では、ほとんど『止觀輔行傳弘決』の三聖派遣説を踏襲する同時代の他の仏書とは異なり、三聖派遣説における菩薩名の割当において無住はあえて、「世人常云孔子是儒童菩薩」というもう一説のほうを取り入れたその背景には、二つの要因が存することを

指摘した。一つは道宣の『広弘明集』、延壽の『萬善同歸集』及び契嵩の『鐔津文集』において同説の三聖派遣記事が見出されることと大いに関係するのである。そこに、三教一致の融和思想を唱える智覺禪師延壽や儒仏不二論を主張する契嵩への、無住の深い私淑や傾倒が大きく機能していたことが想定される。もう一つの要因は、『沙石集』という書物の編纂が、庶民の生活により近い話を持ち出して「愚かなる人」「在家の愚俗」に向けて仏道精進を勧進するという明白な目的を有することにある。硬質の仏教教学ではなく、庶民の生活により近い話を持ち出して説くべく、無住は唐代にすでに世間に浸透していたと思われる説を援用したかと考えられる。無住は本地垂迹の自説を裏付けるために、中国における三聖派遣の事例を借用したことは明らかであるが、『沙石集』『聖財集』『雑談集』の三書において三聖派遣説を再三繰り返し援用するのみならず、「起世経ノ説也。或ハ我遣三聖トテ、顔回ヲソヘタリ。経ノ異説也」[18]とあるように、典拠まで自ら掲示したところから、無住の三聖派遣説への関心の深さが端的に示されている。そのような関心は実に、儒釈道三者が一致・融和する思想への彼の強い感興や志向に基づいてのものであったことを考察した。

---

[18]『雑談集』巻八「老子経生地死地事」。山田昭全・三木紀人校注『雑談集』（東京：三弥井書店　1976 年）、244 頁。